

母親の養育態度が子供の社会的スキルに及ぼす影響

Influences of Maternal Attitudes on Social Skill of Their Children

肥後橋 敬子

HIGOBASHI Keiko

(和歌山大学教育学部)

児童期の子供にとって、適切な時期に適切な社会的スキルを獲得することは、社会性の発達の重要な側面であり、「生きる力」の育成と深く関わっていると思われる。本研究では、対人関係を主軸とした社会的スキルは、学校場面と家庭場面とではどのような関連があるのか、また家庭での母親の養育態度が子供の社会的スキルにどのような影響を与えるのかについて検討することを目的とした。

子供の学校及び家庭における社会的スキルと母親の養育態度を測定するため、自己評定用質問紙を作成して、3校の公立小学校5・6年生児童429名を対象として実施した。因子分析の結果、学校における社会的スキルには、「思いやりのスキル」、「自己中心的行動」、「自己主張のスキル」の3因子が、家庭における社会的スキルには、「配慮のスキル」、「ネガティブな行動」、「積極的関わりのスキル」の3因子があることが判明し、それぞれ尺度を構成した。母親の養育態度を検討した結果、「情緒的支持」、「同一化」、「自律性」、「統制」の4つが下位尺度として確認された。

母親の養育態度と家庭における社会的スキルとの関連を重回帰分析により調べた結果、男子では、「配慮のスキル」には「情緒的支持」と「自律性」が、「ネガティブな行動」には「統制」が、「積極的関わりのスキル」には「自律性」と「統制」が影響を及ぼすことが明らかになった。女子では、「情緒的支持」が「配慮のスキル」と「積極的関わりのスキル」の両方に影響を及ぼすことが明らかになった。次に、養育態度と子供の学校における社会的スキルの関係を調べた結果、男子の場合、「思いやりのスキル」には「情緒的支持」が影響していることがわかった。一方、女子の場合は、「思いやりのスキル」には「情緒的支持」と「統制」が影響し、「自己中心的行動」に対しては「同一化」と「統制」がプラスに、「情緒的支持」がマイナスに影響し、「自己主張のスキル」に対しては「統制」と「情緒的支持」が影響していることがわかった。さらに、家庭における社会的スキルの獲得が、学校における社会的スキルに大きく影響していることが示唆された。男女ともに、家庭における「配慮のスキル」と「積極的関わりのスキル」が学校における「思いやりのスキル」に、家庭における「ネガティブな行動」が学校における「自己中心的行動」に、家庭における「配慮のスキル」が学校での「自己主張のスキル」に影響をもたらすことが明らかにされた。

キーワード：社会的スキル 養育態度 思いやり 自己主張 情緒的支持

1. 問題

社会状況が著しく変化している今日現在、教育に携わる人々の中での大きな関心事の一つに、社会性の発達特に対人関係の問題があげられる。

その中でも特に、集団における対人関係に目を向け、子供の社会的スキルについて調査することにした。社会的スキルは、対人場面における対人目標を達成するために用いられる言語的・非言語的な対人行動として実行される。個々の対人行動の統合と統制、他者の行動理解、社会的ルールに関する知識、感情統制など対人的な能力が要求される。しかし、昨今の教育現場で

の状況を見てみると、この社会的スキルの乏しい子供が増えており、集団の中でうまく自分を表現したり、他者との関わりの中で協調的な態度や思いやりの心で接したりすることができず、それがきっかけとなって問題行動を起こしていくことが多くなっている。そこでこれらの原因や背景を考えたとき、子供がこれまで育ってきた家庭をはじめとして、子供を取り巻く環境の中で、人と人とのつながりや関係性における発達を育む機能が低下してきているのではないかと、また、ある特定の社会的スキルが欠如していたり不適切に学習されたりしてきたのではないかとと思われる。

社会的スキルの不足や欠如は、認知発達や学業成績

の遅れ、学校での不適応、学校からのドロップアウト、成人してからの精神保健上の問題などに大きな影響を及ぼす。したがって、子供の社会的スキルの不足や欠如を改善し、望ましい対人関係を子供が作り上げていけるように援助することは、教育に携わっている者にとっては、急務の課題であると考えられる。

最近、学校教育の現場では、「生きる力」の育成が声高に叫ばれている。ここ数年来の子供たちの様子を見てみると、確かに様変わりしてきていることは事実である。言われたことと与えられた課題などを真面目にきちんと学習するという態度ではよい面を持っている反面、自ら進んで学習しようとする意欲が少ない、他人の言動に振り回され自分の意志で物事を決定できない、挫折や失敗などちょっとしたことにも打たれ弱い、目的や目標に向かって持続的に努力することをしない、困難な状況からすぐ逃げ出してしまい立ち向かっていこうとはしないなど、自分から何かをしようとする積極的かつ能動的態度の面で随分脆弱になってきている。友達との付き合い方を見ていると、表面的な付き合いしかできず、集団の中で孤立して浮いていたり、他人に対する思いやりや共感性が少なかったり、向社会的な行動ができなかったりして、全体的に人間関係が希薄になってきているように思われる。またテレビゲームやパソコンの普及により、家の中に閉じこもって生活することが多くなり、集団で遊んだり異年齢の子供と接したりすることが少なくなったことにより、集団でのルールを学習する場が減少し、集団行動をすることそのものが次第に困難になってきているのではないかとと思われる。

一般的に、子供が生まれて初めて結びあう人間関係は、母親およびその家族との関係である。親をはじめ家族は子供の社会化の最初の担い手であり、子供はそのような関係の中で、社会集団の一員として必要な行動規範や行動様式などの社会的な学習を開始し、対人関係に必要な社会的スキルを獲得していくのである。

人との関わり合いの中で、社会的スキルを獲得する際に、最初にどのようなモデルに出会うか、そのモデルとどのような人間関係を結びあうかということは、学習者である子供にとって、「人間をどのように学習するか」を決定づける大きな要因となる。「人間」に対してどのような関心を持つか、またどのような基本的信頼を持つか、その関係の中でどのような基本的安定感を獲得するかという、その後の人間関係の成立と発展の基盤を与えられる上で、人生で初めて出会う「人」の持つ意味は大きいと考えられる。

したがって、社会的スキルを獲得していく過程において、その基盤となる特定の人との情緒的結合を持った人間関係がしっかりと成立していないと、そのような人間関係を通しての「モデル学習」が十分に進められていかないと考えてくる。人間を学習し、人間

としての基本的なあり方や振る舞い方あるいは他人との接し方などを子供自身が能動的に学習し、そのスキルを獲得していく過程において、重要な人的動機付け(human motivation)の基盤となるのが、「母親」であり、養育者である。故に、母親がどういう考えのもとに子育てをするのか、どういう養育態度で育てるのかということは、社会的スキルの獲得の面で極めて関連が深いと言えよう。

人間形成は人との関係の中で達成されていくものであり、それを方向づけ、人間関係や社会関係を規定するのは、社会の期待のシステムによるところが大きい。家庭であれ学校であれ、それぞれの社会は、「期待される人間像」(社会の要求する人間)をいだいている。公教育の場である学校という社会では、その実現が強く期待されていることが多い。子供に対して、どのような価値観と行動パターンを、どのような社会的慣習や習慣を、またどのような人間同士の社会関係を、さらにどのような人間観・個と集団との関係を教育していくかは学校現場においては非常に重大なテーマである。子供達は学校という社会集団の中で対人関係を通して実に様々なことを学んでいく。この時期に適切な社会的スキルを獲得することはその後の人生における人間関係を大きく左右する結果となる。

以上のような観点から、本研究では、児童期の子供達の「学校」における社会的スキルと母親の養育態度との間にはどのような関連があるのかということについて検討する。堀内(1991)は、学校不適応に陥った子供の親のタイプを、①子供への理解が表面的で一方的 ②言語がきわめて自己中心的 ③子供の気持ちを理解してはいるが、関わり方が下手で、自分の気持ちをうまく子供に伝えられない の3タイプに分類している。また、攻撃行動というのは、社会的文化的背景のもとで、親子関係をはじめとする現実の人間関係の中で形成されるものである。母親の罰が厳しいほど子供の攻撃性は強くなるという研究もあり、親の統制的な養育態度は、一般的に子供の反抗的・攻撃的反応を引き出すと考えられている。戸ヶ崎ら(1997)は、母親の拒否的な養育態度は、子供の社会的スキルの獲得を低くすると報告し、森下(1990)は、子供が親の攻撃性を自己のモデルとしている可能性があることを報告している。

さらに、猪股(1983,1985)が中学生に対して行った調査によれば、子供の反社会的傾向の出現率は、男子では親の養育態度が拒否的である場合、それが受容型である場合の2.7倍を示し、女子では1.8倍を示すという結果が報告されている。これは、子供の反社会的傾向は親の養育態度が拒否的である場合に高頻度に出現しやすくなるということを表している。同様に、Hoffman(1963)によれば、罰や脅しを用いて社会的行動をとらせようとする力中心の養育態度は子供に恐怖

や怒りを引き起こし、社会的行動を育てないという報告もある。つまり、命令や脅しを中心とする力中心ストラテジー (power-assertive strategy) は、社会性の発達に対してマイナスの影響を与え、説明を与えながら自ら考えさせる誘導的ストラテジー (victim-centered strategy) は、プラスの影響を与えると考えられるのである。このような観点から考えると、拒否的な養育態度や統制の強すぎる養育態度は、それが母親である場合特に児童への影響力が大きいのではないかと考えられる。それらの養育態度は児童の社会的スキルの学習を阻害する危険性を孕んでいると思われる。

したがって、集団の中で対人関係がうまくいかず、社会的スキルの低い子供の中には、親の養育態度に何らかの問題点を抱えており、その親の行動に影響されて社会的スキルがうまく獲得できていないケースがあるのではないかと考え、その関係を明らかにしていくことを目的とする。

児童期の子供にとって、対人関係をよりよく結ぶために様々な社会的スキルを獲得することは、社会性の発達の面から考えても重要な課題であり、「生きる力」の育成とも深く関連していると考えられる。学校という集団の中では、特に、友達と仲良くする、人と協力して円滑に活動を行う、先生や友達の話をよく聞き言われたことやしなければならぬことには従順に従う、相手の立場になって物事を考え行動する、人の心の痛みがわかる、自分の思いや考えを相手に伝えることができる・・・等の社会的スキルを適切な時期に適切に学習し、身につけていくことが必要である。

そこで、本研究では、児童期の子供の学校における社会的スキルについて、自己評定用尺度を使ってその信頼性と妥当性を検討し、学校における社会的スキルの構造を明らかにする。そして、親子関係という相互作用の中で、社会的スキルがどのように発達していくのかを明らかにする。さらに、社会的スキルの発達は親子関係のどのような次元と関係が深いのかについて検討する。母親の養育態度の主な次元としては、愛情に関する次元 (受容—拒否) と行動の統制に関する次元 (統制—自律性尊重) が考えられる。そこで、母親の養育態度と学校における社会的スキルの関連について検討する。

次に、家庭における社会的スキルについても同様に検討する。

最後には、学校における社会的スキルと家庭における社会的スキルの関連を検討する。学校における社会的スキルの高さや家庭における社会的スキルの高さとの間にはどんな関係があるのかを明らかにしていきたいと考える。

仮説としては、

①受容的な養育態度は学校における社会的スキルを高め、拒否的な養育態度は社会的スキルを低くする。

②子供の自律性を重んじる養育態度は学校における社会的スキルを高め、統制的な養育態度は社会的スキルを低くする。

③男子に比べ女子の方が学校における社会的スキルが高い。

④家庭での社会的スキルの獲得が、学校での社会的スキルに影響している。
の4点が考えられる。

2. 方法

(1) 被験者：

和歌山県下の公立小学校3校に在籍する高学年児童429名 (5年生男子114名, 5年生女子88名, 計202名, 6年生男子113名, 6年生女子114名, 計227名) を対象に調査をした。

(2) 調査期間：

2004年3月1日～2004年3月5日まで

(3) 手続き：

質問紙法により小学生児童に回答してもらった。①学校生活における社会的スキルの測定、②家庭生活における社会的スキルの測定、③母親の養育態度の測定、のために3つの質問紙を作成した。あらかじめこの順番で3種類の質問紙をとじて1冊の冊子とし、「小学生の生活調査」として配布した。子供への説明として、本調査は学校の成績には一切関係がないこと、また記入した内容が研究以外の目的で公開されることはないことなどを担任教師から話してもらった。担任の先生にお願いして、授業時間のなかで時間をとってもらい一斉に無記名方式で回答してもらった。なお、本調査は、学校長、教頭、担任教師の了解のもとで実施された。

回収にあたっては、担任の先生にまとめて集めてもらい、学校ごとにそろった段階で回収させてもらう形をとった。調査時間は20～25分位であった。

(4) 用いた尺度：

A. 学校における社会的スキル尺度の測定

学校における社会的スキル尺度 (戸ヶ崎 他 1997)、小学生スキル尺度 (河村 2001)、児童・生徒用の社会的スキル尺度 (庄司 1991)、のうちより、学校生活において、適切な対人関係や仲間関係を形成し、維持するために必要とされるソーシャル・スキルを30項目選んで用いた (表1)。評定尺度は、ぜんぜんしない (1)、あまりしない (2)、ときどきする (3)、いつもする (4) とし、評定は4件法を用いた。

B. 家庭における社会的スキル尺度の測定

家庭における社会的スキル尺度 (戸ヶ崎 他 1997) の20項目を用いた (表2)。評定尺度は、ぜんぜんしない (1)、あまりしない (2)、ときどきする (3)、いつもする (4) とし、評定は4件法を用いた。

表1 学校における社会的スキルの因子パターン

項目	思いやりの スキル	自己中心的 行動	自己主張の スキル	共通性
A 1 2 引き受けたことは最後までやりとおす	.650			.381
A 2 6 自分がしてもらってうれしいことを、友達にもする	.618			.385
A 1 8 相手の気持ちを考えて話す	.595			.350
A 2 8 みんなのためになることを、自分から見つけて行動する	.568			.290
A 1 友達が困っているとき、手助けする	.563			.340
A 2 7 友達の話は最後までじっくり聞く	.546			.321
A 2 4 友達に、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝える	.516			.282
A 1 4 友達が何かうまくしたとき、「じょうずだね」とほめる	.515			.259
A 1 5 友達の意見に反対するときには、きちんとその理由を言う	.514			.250
A 6 友達が悲しんでいるとき、なぐさめたりはげましたりする	.511			.300
A 8 友達のたのみをよく聞いてあげる	.477			.215
A 3 自分に親切にしてくれる友達には、親切にする	.440			.223
A 1 1 まちがいがあつたら、すなおにあやまる	.438			.230
A 2 5 悪いと思ったら、すなおに「ごめんなさい」と言える	.436			.282
A 2 3 友達との約束を守る	.411			.223
A 3 0 みんなで決めたルールはきちんと守る	.377			.281
A 2 9 他人の意見に左右されないで、自分の考えで行動する				.068
A 5 人をおどかしたり、人に対していばったりする		.676		.443
A 2 0 よく友達のじゃまをする		.675		.495
A 9 何でも友達のせいにする		.610		.395
A 1 7 友達に、らんぼうな話し方をする		.599		.367
A 2 2 自分のしてほしいことを、むりやり友達にさせる		.575		.328
A 7 自分から友達にけんかをしかけることがある		.574		.332
A 2 友達の欠点や失敗をよく言う		.561		.314
A 1 3 友達の遊びの中に入っていくことができる			.806	.595
A 1 9 友達と交わって、おおぜいで遊ぶ			.641	.384
A 4 友達には、自分から話しかけていく			.586	.422
A 1 0 休み時間には、友達とおしゃべりをしたり遊んだりする			.518	.274
A 2 1 友達にきがるに話しかけることができる			.514	.331
A 1 6 友達に話しかけようとする、ドキドキする				.049

累積寄与率：37.7%

表2 家庭における社会的スキルの因子パターン

項目	配慮の スキル	ネガティブ な行動	積極的関わ りのスキル	共通性
B 7 家族の人の手伝いをする	.832			.543
B 6 家のそうじやかたづけをする	.667			.385
B 1 9 家族の人に用事をたのまれたら、すなおにする	.589			.453
B 1 8 家族の人が困っていたら、助けてあげる	.574			.371
B 9 家族の人の手伝いを引き受けたら、最後までやりとおす	.522			.399
B 1 家族のためにへやをあたたくしてあげる	.444			.287
B 5 悪いことをしてしかられたら、すなおにあやまる	.325			.241
B 1 2 家族の人がよくしてくれたら、「ありがとう」と言う				.064
B 4 食事できらいなものがでも、もんくを言わずに食べる				.151
B 1 1 家族の人にうそをついたことがある		.638		.357
B 1 5 何でも家族の人のせいにする		.599		.394
B 1 3 家族の人のものかかってに借りたり使ったりしたことがある		.584		.260
B 8 家族の人を困らせることがある		.569		.307
B 2 0 家族の人にらんぼうな話し方をする		.550		.433
B 1 7 家族の人には、いばったたいどをとる		.482		.368
B 2 家族の人に注意されると、すぐにおこってしまう		.396		.183
B 1 0 家族の中では、自分の思いをはっきり言える			.650	.436
B 1 4 家族の人に、「いいえ いやです」とはっきり言える			.604	.383
B 1 6 家族の中では、したいことができる			.362	.125
B 3 家族の人におこられた時、自分が正しいと思ったら言い返す			.240	.078

累積寄与率：30.78%

C. 母親の養育態度の測定

辻岡美延の作成した親子関係尺度EICAより、40項目を用いた。評定尺度は、いいえ(1)、?(2)、はい(3)とし、評定は3件法を用いた。

3. 結果

(1) 尺度の作成

学校における社会的スキル30項目について因子分析した。まず因子数を決定するにあたっては、主成分分析による固有値の変動に注目しながら初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから3因子解が適当であると判断した。次に、主因子法により因子分析を行いプロマックス回転(斜交)で5回反復した。パターン行列によると3個の因子は、比較的単純構造を示していた(表1)。

その結果、第1因子は、「自分がしてもらってうれしいことを、友達にもする」、「友達が困っているとき、手助けする」などの16項目からなり(1・3・6・8・11・12・14・15・18・23・24・25・26・27・28・30)、「思いやりのスキル」と命名した。第2因子は、「人をおどかしたり、人に対していばったりする」、「よく友達のじゃまをする」などの7項目からなり(2・5・7・9・17・20・22)、「自己中心的行動」と命名した。また第3因子は、「友達の遊びの中に入っていくことができる」、「友達には、自分から話しかけていく」などの5項目からなり(4・10・13・19・21)、「自己主張のスキル」と命名した。なお、各尺度の信頼性を示す α 係数はそれぞれ、第1因子が.84、第2因子が.80、第3因子が.74であり、比較的高い内的整合性を示していた。

次に家庭における社会的スキル20項目を主因子法、プロマックス回転(斜交)によって因子分析した。因子数を決定するにあたっては、主成分分析による固有値の変動に注目しながら初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから3因子解が適当であると判断し、プロマックス回転(斜交)で5回反復した。パターン行列によると3個の因子は、比較的単純構造を示していた(表2)。

その結果、第1因子は、「家族の人の手伝いをする」、「家族の人が困っていたら、助けてあげる」などの9項目からなり(1・4・5・6・7・9・12・18・19)、「配慮のスキル」と命名した。第2因子は、「家族の人を困らせることがある」、「家族の人には、いばったたいどをとる」などの7項目からなり(2・8・11・13・15・17・20)、「ネガティブな行動」と命名した。また第3因子は、「家族の中では、自分の思いをはっきり言える」、「家族の中では、したいことができる」などの4項目からなり(3・10・14・16)、「積極的関わりスキル」と命名した。なお、各尺度の信頼性を

示す α 係数はそれぞれ、第1因子が.78、第2因子が.74、第3因子が.52であり、第1因子と第2因子は比較的高い内的整合性を示していたが、第3因子はやや低い値であった。

さらに、辻岡美延が作成した40項目からなる親子関係診断尺度EICAを使用した。これは中学生・および高校生を対象に作成されているので、改めてEICA親子関係診断検査プロフィールによる因子分析を行った。因子数を決定するにあたっては、主成分分析による固有値の変動に注目しながら初期の固有値の大きさと解釈のしやすさから4因子解が適当であると判断し、プロマックス回転(斜交)で7回反復した。パターン行列によると4個の因子は、比較的単純構造が得られた。

その結果、第1因子は、「心配事をじっくり聞いてくれるので気持ちが楽になる」、「私のなやみや心配事を理解してくれている」などの9項目からなり、「情緒的支持」と命名した。第2因子は、「私に話しかけたり私といっしょにいたがったりする」、「私を喜ばそうとしていろいろなことをする」などの10項目からなり、「同一化」と命名した。第3因子は、「私が行きたいときはいつでも外出させてくれる」、「私がしたいことはどんなことでもさせてくれる」などの9項目からなり、「自律性」と命名した。第4因子は、「私がいつけをまもるまでさせようとする」、「<～をしなさい>といつも私に言う」などの8項目からなり、「統制」と命名した。また、各尺度の信頼性を示す α 係数はそれぞれ、第1因子が.86、第2因子が.82、第3因子が.74、第4因子が.67であり、第1因子・第2因子・第3因子は比較的高い内的整合性を示していたが、第4因子はやや低い値であった。

(2) 各因子の尺度得点

学校における社会的スキルの「思いやりのスキル」「自己中心的行動」「自己主張のスキル」という3つの因子について、それぞれ尺度得点を求めた。4段階評定のそれぞれの得点の総和を出して平均と標準偏差を比べてみた(表3・表4)。

これを基にして、それぞれの因子の得点分布を調べた。その結果から、「思いやりのスキル」に関しては、学校生活をするうえでお互いの対人関係がうまくいくようにそれぞれがだいたい良い社会的スキルを身につけていることが伺える。「自己中心的行動」については、自分勝手に振る舞ったりわがままを通そうとしたりすることは学校生活の中ではわりあい少なく、集団生活に協調して「和」を大事にしようとする日本人的な社会的スキルがうまく身に付いていることがわかる。また、「自己主張のスキル」については、自分から集団に積極的に関わっていったり、自分の思いや考えをみんなの前で主張したりして前向きに集団に参加しよう

としている様子が伺える。

次に、家庭における社会的スキルの「配慮のスキル」「ネガティブな行動」「積極的関わりのスキル」という3つの因子についても同様に比べてみた。これらの結果からわかることは、「配慮のスキル」・「積極的関わりのスキル」に関しては、学校生活と同じように、家庭生活の中でもお互いに家族の人のことを思いやって人間関係が円滑に結べるように気をつけて生活しており、良い社会的スキルを身につけていることが伺える。「ネガティブな行動」に関しては、家庭の中でもあまり自分勝手な行動やわがままをしないように自己抑制をしていることがわかる。ただ学校生活のスキルに比べて家庭での平均点が高くなるのは、やはり家庭の中では少し気を抜いて楽に振る舞うことができ、安心して自分を出せるということではないかと思われる。また、「積極的関わりのスキル」に関しては、随分アンバランスな分布の仕方になっている。この年齢では家庭の中であまり自分から関わっていったり自己表現したりしなくても、親の方からいろいろと世話を焼いたり関わったりしてくれるのでその必要性が少ないということを示唆しているように思われる。

表3 学校における社会的スキルの得点

	平均値	SD	1項目当たりの平均
思いやりのスキル	50.14	6.45	3.13
自己中心的行動	14.11	3.86	2.02
自己主張のスキル	17.23	2.58	3.45

表4 家庭における社会的スキルの得点

	平均値	SD	1項目当たりの平均
配慮のスキル	27.50	5.04	3.06
ネガティブな行動	17.24	3.10	2.46
積極的関わりのスキル	12.58	3.41	3.15

(3) 母親の養育態度と社会的スキルとの相関

A. 母親の養育態度と学校における社会的スキルとの相関

すべてのデータがそろった分(男子211名 女子193名 計404名)について、男女別に、母親の養育態度と子供の学校における社会的スキルとの相関係数を求めた(表5・表6)。

表5 母親の養育態度と学校における社会的スキルとの相関係数 (男子)

	情緒的 支持	同一化	統制	自律性
思いやりのスキル	.275**	.160	.079	.099
自己中心的行動	-.145*	-.037	.113	-.044
自己主張のスキル	.119	.060	.015	.136*

* $p < .05$, ** $p < .01$ (以下同様)

表6 母親の養育態度と学校における社会的スキルとの相関係数 (女子)

	情緒的 支持	同一化	統制	自律性
思いやりのスキル	.197**	.112	.195**	-.166**
自己中心的行動	-.107	.019	.244**	-.012
自己主張のスキル	.146*	.046	.184**	-.049

B. 母親の養育態度と家庭における社会的スキルとの相関

すべてのデータがそろった分(男子200名 女子183名 計383名)について、男女別に、母親の養育態度と子供の家庭における社会的スキルとの相関係数を求めた(表7・表8)。

表7 母親の養育態度と家庭における社会的スキルとの相関係数 (男子)

	情緒的 支持	同一化	統制	自律性
配慮のスキル	.416**	.316	.098	.189**
ネガティブな行動	-.014	.040	.214**	-.010
積極的関わりのスキル	.137	.051	.123	.111

表8 母親の養育態度と家庭における社会的スキルとの相関係数 (女子)

	情緒的 支持	同一化	統制	自律性
配慮のスキル	.359**	.322**	.062	-.074
ネガティブな行動	-.158	-.103	.097	.083
積極的関わりのスキル	.195**	.067	-.002	.096

(4) 養育態度と社会的スキルに関する重回帰分析

母親の養育態度が、学校における社会的スキルと家庭における社会的スキルをどのように規定しているかを明らかにするために、次のような重回帰分析を行った。

A. 母親の養育態度と学校における社会的スキル

学校における社会的スキルの3因子をそれぞれ従属変数に、母親の養育態度の4因子を独立変数にして、男女別に強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、男子の場合、「思いやりのスキル」に関しては、「情緒的支持」のβ係数が有意であった($p < .01$)。「自己中心的行動」に関しては、「情緒的支持」のβ係数が有意であった。「自己主張のスキル」に関しては、「自律性」のβ係数が有意であった。

一方、女子の場合は、「思いやりのスキル」に関しては、「情緒的支持」と「統制」のβ係数が有意であった($p < .05$, $p < .05$)。「自己中心的行動」に関しては、「統制」と「情緒的支持」のβ係数が有意であった($p < .01$, $p < .05$)。「自己主張のスキル」に関しては、「統制」と「情緒的支持」のβ係数が有意であった($p < .01$, $p < .05$)。

以上、学校での社会的スキル獲得を予測する変数として、男子に関しては、母親の受容的で自律性を尊重する養育態度が、女子に関しては、母親の受容的で統制的な養育態度が重要であることが明らかとなった。このように男女いずれにおいても母親の受容的な養育態度が重要な変数であることが注目される。

それに対して、母親の統制的な養育態度は、男子に関してはどのような変数も関連していなかったが、女子に関しては、すべての要因を規定していた。このことは、女子は男子よりもきっちりとした少し厳しい位のしつけをした方が社会的スキルの獲得が高くなるということを示している。

B. 母親の養育態度と家庭における社会的スキル

次に、家庭における社会的スキルの3因子をそれぞれ従属変数に、母親の養育態度の4因子を独立変数にして、男女別に強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、男子の場合(図1)、「配慮のスキル」に関しては、「情緒的支持」と「自律性」のβ係数が有意であった($p < .01$, $p < .05$)。「ネガティブな行動」に関しては、「統制」($p = .001$)のβ係数が有意であった($p < .01$)。「積極的関わりのスキル」に関しては、「自律性」・「統制」・「情緒的支持」のβ係数が有意であった($p < .05$, $p < .05$, $p < .1$)。

一方、女子の場合(図2)は、「配慮のスキル」に関しては、「情緒的支持」のβ係数が有意であった($p < .01$)。「ネガティブな行動」に関しては、「自律性」のβ係数がやや有意であった($p < .1$)。「積極的関わりのスキル」に関しては、「情緒的支持」のβ係数が有意であった($p < .01$)。

以上、家庭での社会的スキル獲得を予測する変数として、男子に関しては、母親の受容的で自律性を尊重する養育態度が、女子に関しては、母親の受容的な養育態度が重要であることが明らかとなった。このように男女いずれにおいても母親の受容的な養育態度が重要な変数であることが注目される。

それに対して、母親の統制的な養育態度は、男子に関しては、「ネガティブな行動」と「積極的関わりのスキル」の要因を規定し、女子に関してはどのような変数も関連していなかった。このことは、きっちりとした少し厳しい位のしつけも家庭内ではあまり効果が少ないということを表している。

C. 家庭における社会的スキルと学校における社会的スキルとの関連

さらに家庭における社会的スキルと学校における社会的スキルとの相関を求めた(表9・表10)。そして、学校における社会的スキルの3因子をそれぞれ従属変数に、家庭における社会的スキルを独立変数にして、重回帰分析を行い、男女別にそれぞれ比較してみた。

男子では、学校での「思いやりのスキル」に関しては、家庭での「配慮のスキル」と「積極的関わりのスキル」のβ係数が有意であった($p < .01$, $p < .01$)。学校での「自己中心的行動」に関しては、家庭での「ネガティブな行動」と「配慮のスキル」(マイナス)のβ係数が有意であった($p < .01$, $p < .01$)。学校での「自己主張のスキル」に関しては、家庭での「配慮のスキル」のβ係数が有意であった($p < .05$)。さらに、家庭での「配慮のスキル」が学校での「自己中心的行動」にマイナスに影響することも示唆された。

また、女子では、学校での「思いやりのスキル」に関しては、家庭での「配慮のスキル」と「積極的関わりのスキル」のβ係数が有意であった($p < .01$, $p < .05$)。学校での「自己中心的行動」に関しては、家庭での「ネガティブな行動」のβ係数が有意であった($p < .01$)。学校での「自己主張のスキル」に関しては、家庭での「配慮のスキル」のβ係数が有意であった($p < .05$)。さらに、家庭での「配慮のスキル」が学校での「自己中心的行動」にマイナスに影響することも示唆された。そして家庭での「ネガティブな行動」が学校での「思いやりのスキル」にマイナスに影響することも示唆された。

表9 家庭スキルと学校スキルの相関(男子)

	配慮のスキル	ネガティブな行動	積極的関わりのスキル
思いやりのスキル	.540**	-.117	.328**
自己中心的行動	-.295**	.537**	-.003
自己主張のスキル	.197**	.009	.143*

表10 家庭スキルと学校スキルの相関(女子)

	配慮のスキル	ネガティブな行動	積極的関わりのスキル
思いやりのスキル	.391**	-.201**	.134
自己中心的行動	-.150*	.421**	.084
自己主張のスキル	.169*	-.011	.090

以上の結果より、家庭および学校における社会的スキルは相互に影響し合っていると考えられるが、さらに分析したところ、家庭における社会的スキルの方が学校における社会的スキルにより大きな影響を及ぼしていることが明らかになった(図1・図2・次ページ)。

4. 考察

本研究の主要な目的は、母親から受容的で愛情をたっぷり注いだ育て方をされた場合、子供の社会的スキルは家庭でも学校でも良く育ち、対人関係を上手に結ぶことができるのではないかとという仮説を検証することであった。

学校および、家庭における社会的スキルの因子分析の結果、小学生の学校における社会的スキルは、円滑な対人関係を結ぶために必要なスキルである「思いや

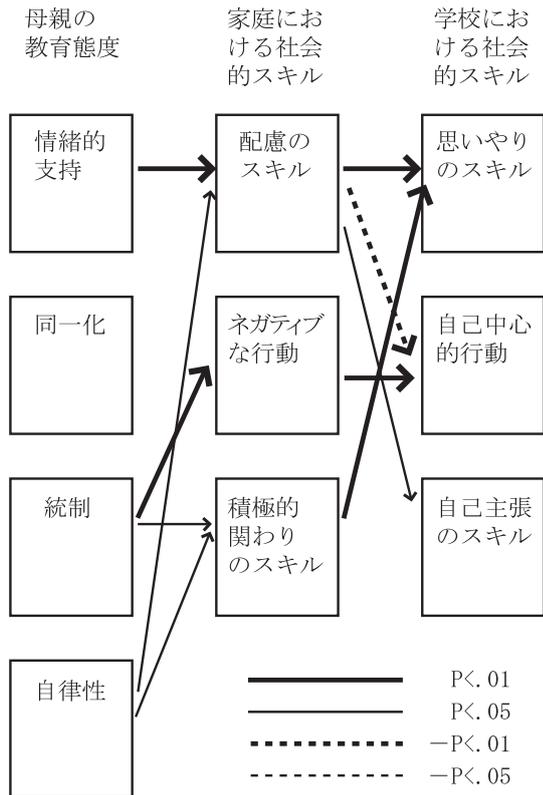


図1 母親の養育態度と社会的スキルとの関連 (男子)

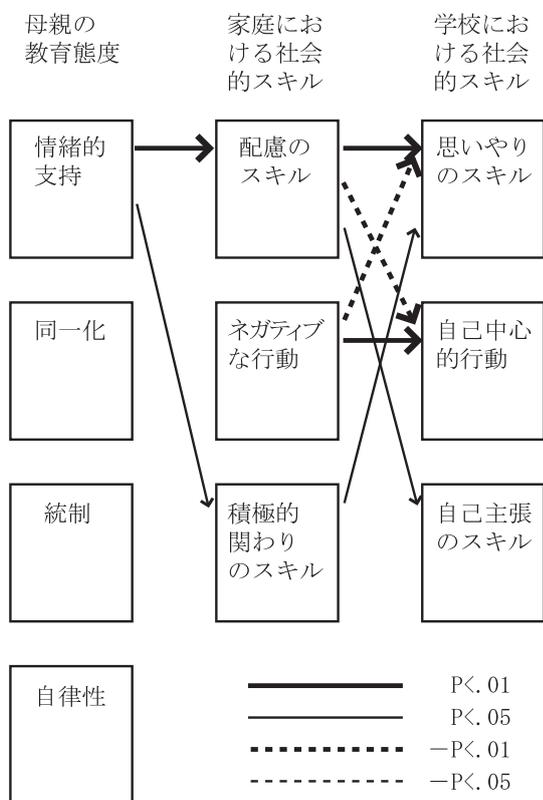


図2 母親の養育態度と社会的スキルとの関連 (女子)

りのスキル」、「自己中心的行動」、「自己主張のスキル」の3つから構成されており、家庭における社会的スキルも「配慮のスキル」、「ネガティブな行動」、「積極的関わり」の3つから構成されていることが明らかにされた。そして、学校における社会的スキルと家庭における社会的スキルの相関は、同じような性質を持った因子と中程度の正の相関を示していた。つまり、学校で観察される社会的スキルは家庭でも同じように見受けられる可能性が高いことが示唆された。

母親の養育態度と子供の社会的スキルとの関係については、分散分析と重回帰分析の結果、男女とも母親の養育態度の「情緒的支持」の傾向が強いほど家庭においても学校においても「配慮のスキル」や「思いやりのスキル」の獲得が多いことが明らかにされた。しかし、女子の場合は、「統制」も「思いやり・配慮のスキル」を高めることが示唆された。さらに女子の場合、「統制」が「自己中心的行動」や「積極的関わり・自己主張のスキル」を高めることが示唆された。このことから、男女によって有効な養育態度が違うことが新たに明らかになった。また、「統制」が「思いやり・配慮のスキル」と「自己中心的行動」や「積極的関わり・自己主張のスキル」という相反するスキルに両方とも影響することが示唆された。しかし、どのような子供が母親の養育態度をモデルと考えたりあるいは罰刺激だと感じたりするのかについては、男女差のみならず個人の特性にも関与していると思われるので、今後はそれらのことも併せて考えていく必要があるだろう。また、対象児の年齢を変えてみるとどんな結果が出てくるのかにも今後の研究として注目してみたい。

重回帰分析によって、母親の養育態度と家庭における社会的スキルと学校における社会的スキルという3つの関係を調べてみた結果、母親の養育態度が家庭における社会的スキルと学校における社会的スキルの両方に影響を及ぼし、さらに、家庭における社会的スキルが学校における社会的スキルに影響を及ぼすということが示唆された。

男子では、家庭における「配慮のスキル」の高さが、学校における「思いやりのスキル」と「自己主張のスキル」に影響し、家庭において「ネガティブな行動」の多い子供は学校においてもやはり「自己中心的行動」が多くなり、家庭における「積極的関わり」が学校での「思いやりのスキル」に影響をもたらすことが明らかにされた。

また、女子では、家庭における「配慮のスキル」が学校での「思いやりのスキル」と「自己主張のスキル」に影響し、家庭での「ネガティブな行動」はそのまま学校での「自己中心的行動」につながり、家庭で「積極的関わり」の高い子供は学校での「思いやりのスキル」が高くなることが明らかにされた。

以上の結果は、家庭における社会的スキルが学校に

における社会的スキルに重大な影響を及ぼしていることを示している。「母親の養育態度——→家庭における社会的スキル——→学校における社会的スキル」というモデルが支持されたのではないと思われる。この結果は、戸ヶ崎ら（1997）が行った学校における社会的スキルは家庭における社会的スキルに強く影響され、特に家庭での行動が学校での同じような性質の行動を規定するという研究の成果を支持することになった。このことから考えてみても、社会的スキルの獲得は児童期の子供にとって必要不可欠のことであることは、明らかである。

また、社会性の発達や対人関係につまづきを持つ軽度発達障害の子供達については、今後さらにより多くの人々の関心を集め、社会的問題として取り上げられることが増えるであろうと考えられる。したがって、子供の発達に合わせた社会的スキルの尺度を作成し、対人関係の教育や改善に役立てられることが望まれる。

本研究においては、子供の社会的スキルや母親の養育態度の測定は子供自身の評定によるものであった。また、母親の養育態度が子供の社会的スキルに影響を与えているだけではなく、逆に子供自身の気質などが母親の養育態度に影響を与えたのか、その因果関係を明らかにしてはいないという限界がある。さらに、今後は父親の養育態度が子供の社会性の発達にどのような影響を与えるのかを明らかにしていくことも、残された課題であると言えよう。また、家庭での養育態度のみならず、学校においては教師の子供に対する態度が、社会的スキルを高めていく上でどのような影響をもたらしているのかについても研究していく余地があると思われる。

正しい社会的スキルが適切な時期に獲得されなかったり、実行されなかったりすることが原因となって学校で不適応状態に陥っていると思われる児童は決して少なくない。本研究の結果から考えると、学校場面で児童に働きかけるだけではなく、家庭教育への介入も必要になってくる。学校場面でのSST (Social Skill Training) や母親の養育態度の変容をも含めた指導プログラムの導入もひとつの大きな手立てとなるであろう。

引用文献

相川充・津村俊充 1996 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係 自己表現を援助する 誠信書房
 東洋・柏木恵子・R. D. ヘス 1981 母親の態度・行動と子供の知的発達—日米比較の研究— 東京大学出版会
 バーバラ・コロローソ 田栗美奈子 訳 2000 子供

に変化を起こす簡単な習慣 <豊かで楽しいシンブル子育てのすすめ> PHP研究所
 ダン・カイリー Dr. Dan Kiley 近藤裕 訳 しつけを考える本<厳しく愛する心> 1985 社会思想社
 Hoffman, M. L. 1963 Parent discipline and the child's consideration for others. Child Development, 34, 573-588
 井上健治 1984 子供と教育を考える 16 友だちができない子 岩波書店
 加藤秀俊 1982 講座 現代の心理学7 個人・集団・社会 小学館
 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から 発達心理学研究, Vol. 13, No. 1, 30-41
 河村茂雄 2003 学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討 カウンセリング研究 Vol. 36 No. 2 121-128
 文部省 平成元年 現代の家庭教育——小学校高学年・中学校期編——
 森下正康 1988 児童期の母子関係とパーソナリティーの発達 心理学評論, Vol. 31, No. 1, 60-75
 森下正康 1990 幼児の攻撃行動と向社会的行動のモデリングにおよぼす母子関係の影響 心理学研究 61, 103-110
 森下正康 1991 児童の自己強化におよぼす複数モデルと自己評価の影響 心理学研究, 62, 54-57
 森下正康・仲野綾 1996 児童の共感性の認知的因子と情動的因子が向社会的行動におよぼす影響 和歌山大学教育学部紀要 第46集, 57-71
 森下正康 1998 幼児期の母子関係が子供の思いやりにおよぼす影響 和歌山大学 教育学部紀要 第48集 1-14
 森下正康 2003 幼児の自己制御機能の発達研究 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 No. 13 47-56
 名倉啓太郎 1973 朝倉保育基礎講座3 社会性の発達 朝倉書店
 新村豊 1980 よい子が危ない*心身障害児の発生原因とその療育* りょう明書房
 大西誠一郎 1971 親子関係の心理 金子書房
 酒井博世 1988 発達と教育の基礎理論<叢書 教育学・講義II> 教育史料出版会
 作田勉・猪股丈二 1985 思春期対策1 思春期対策 誠信書房
 総務庁青少年対策本部 1987 日本の子供と母親——国際比較——〔改訂版〕 大蔵省印刷局

社会教育協会 1991 家庭と教育を考える 生涯学習
シリーズ6 図書出版社
庄司一子・小林正幸・鈴木聡志 1990 子供の社会的
スキル——その内容と発達—— 日本教育心理
学会第32回総会発表論文集
庄司一子 1991 社会的スキルの尺度の検討——信
頼性・妥当性について——

教育相談研究 第29巻 18—25
戸ヶ崎康子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学
生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響
教育心理学研究, 45, 173—182
山中康裕 1985 子供と教育を考える 22 親子関係
と子供のつまずき 岩波書店